

序 論

黒 田 壽 郎

国際大学中東研究所は、発足以前の大学設立当初より現在にいたるまで数年にわたり、〈イスラーム経済論〉を一つの大きな研究テーマとしてとりあげてきた。このテーマを追究するためには、かなり複雑な問題点がある。その第一は、これまでわが国においては、これほど重要な問題に関して基礎的な研究が存在していないという点があげられるであろう。論議を展開させるにしても、その根拠となる基礎文献の翻訳、紹介が少しもなされていないのである。そこでまず議論展開のよりどころとなる基礎資料の紹介に、焦点をあてることとした。

ムハンマド・バーキルッ＝サドルの「イスラーム経済論」は、その意味で格好の著作であろう。シーア派、スンニー派を問わず、この問題を取りあげる研究者は、この著作を最重要の現代の古典と評価しているのである。この著作がイラン革命の思想的引金の一つであり、イラン・イスラーム共和国の経済政策の基本とされているという点で、きわめてアクチュアルな問題性をもっていることも選択の一つの理由であるが、伝統的なイスラーム法の権威者の一人である著者の法学的知識の確かさが、論証の過程に一定のシーア派的傾きがあるとしても、論議の内容のイスラーム性をなによりもよく保証していると思われることが、その最大の理由である。研究の奥行きはますます深い、イスラーム経済の問題を、現代の問題として考えぬいたこの著作の翻訳を、一応の出発点とすることにはいささかの問題もないであろう。この問題に関する欧米の研究もきわめて立ち遅れている。この点をおもんばかつてか、イランではこの書の英訳が冒頭の部分より順次刊行されているが、残念ながらこの翻訳は悪訳で、まったく利用価値がない。

第二の問題は、イスラーム経済の内実が一般に理解されておらず、それゆえに生ずる認識上の誤りである。現行の経済、金融システムの中で、イスラーム経済はイスラーム諸国の内部でどのような位置、比重を占めるのか。この問題をたんに無利子銀行の実態等に限定することしか知らない論者たちは、その現

状を数値で計り、イスラーム経済などは机上の空論であり、その研究などは絵空事にすぎないなどと断定する。ただしこの種の軽率さこそ、この問題にたいする無知のあらわれにほかなるまい。イスラーム経済は、イスラームの存在そのものと不即不離の関係にあるのであり、その発現の程度に強弱があり、機能の仕方に相違はあったとしても、それは部分的には登場以降連綿として存在しつづけているのである。植民地主義以降の現在のシステムにおいて、なるほどそれは消極的な役割をしか果たしていない。しかしイスラーム世界の経済的活動のはしばしでそれは依然として存続しており、また現在では一つの独自のイデオロギーとしての自己主張を開始しているのである。いまだ潜勢態の域を出ず、氷山の一角をしか形成していない無利子銀行の実態の研究も必要であろうが、われわれにとってはこの種の要求を発現させる大元のもの、原基の構造を知ることの方がはるかに重要ではあるまいか。

怠惰な紋切型の判断ではなくこの種の観点に到達しうる観察者は、この段階でイスラーム経済研究の重要性、豊饒性に思っていたであろう。第一にこの問題の検討は、イスラームそのものに関する正確な認識に直結するものである。この教えが、たんに内的に深淵なものとのみ関わる精神宗教ではなく、独自の経済システムをもっていることと、その意味について、これまで果たしてどれほどの研究者が明確な認識をもちえていたであろうか。研究史にてらしていえば、イスラームはもっぱら精神主義的に語られる傾向が強く、その共同体については古代アッシリア、エジプトと同類の神権政治に依存するものとして捉えられるか、その反面では文化的固有性抜きでの出来合いの判断で裁断されることがあった程度を、さして越えていなかったのではあるまいか。この教えが独自の経済システムをもち、それが多少の変則を受け入れながらもかつては一大帝国を経営しえたことは、重い事実としてわれわれに大きな反省を促さずにはいないであろう。イスラーム経済の研究はまず、信徒にその受け入れが要請される十字の構造、つまり絶対者に赴く精神性の垂直のベクトルと、共同体につながる社会性の水平のベクトルの交差の構造の解明の基本的データとして、イス

ラームそのものの解明に直結しているのである。

第二に、この問題の分析がもつ歴史的射程があげられる。これまで外部の研究者は、イスラーム世界の研究において、支配的な価値体系が社会の形成、歴史の発展に及ぼす影響、それがもたらす伝統の固有性にほとんど眼をつぶってきた。しかしこの様な態度に終始する地域研究は、ほとんど自らの職分を放棄しているようなものであるといえないであろうか。イスラーム経済の研究は、今後この地域の歴史的研究の内実を大幅に矯正するための強力な武器となりうるものであろう。

第三に、この種の研究が今後のこの地域の政治的変化の予測に、大きな貢献をなしうる点があげられるであろう。現在世界的な規模で進行中なのは、さまざまな領域における既成のパラダイムの書き換えである。きわめて単純化した表現を用いるならば、それをモダンからポスト・モダンへの変化とも呼びうるであろう。この種の変化は、これまでもつばら欧米世界内部の問題としてのみとりあげられてきたが、この変化は中東地域におけるイスラーム回帰への動き、その他の第三世界における解放の神学の模索の中にもうかがわれるように、他の文化圏の問題としても顕在化してはいないであろうか。イスラーム経済論におけるバーキルツ＝サドルの分析は、いまだ現代の諸問題に適切に対応しうる精細な文節化に欠けている。しかしこの程度の論議の深化が、A・シャリーアティーの思想とならんでイラン革命の起爆剤となりえたことの意味は、一般に看過されているものの決して軽視されるべきではあるまい。イデオロギーなしの革命など世に存在すべくもないが、このあたりの軽率さが中東世界の政治的変化の読みの浅さにもつながっているのである。宗教的要素と、政治的、経済的要素とが直結しているイスラーム文化圏における、伝統回帰への動きの帰趨、その政治的表現の爆発の予知を行なうためには、イスラーム経済論の進化、発展は、一つの重要なバロメーターなのである。

第四に重要な点は、イスラーム経済論の主張の現代的意味である。イスラーム世界でこの体系が、完全なかたちで具体化されるためには、いまだ克服され

るべき障害が多々山積している。しかしそれが含む種々の要素のある部分は、現代の経済システム、あるいは経済学が逢着している多くの問題の解決について考えるさいに、さまざまな示唆を提示しうるものではあるまいか。財が財を産む経済システムは、現在巨大な累積債務の問題に悩まされているが、その解決のためには結局援助方式にムダーラバ方式を採用することがもっとも望ましい等、イスラーム経済がもつ一つのファセットを現代の問題に適用させることも可能である。また財のあり方、社会との関連に関する基本問題についての考察にあたり、この経済システムは、システム全体として重要な示唆をも与えるであろう。

イスラーム経済論の研究が無用の努力であると判断する論者たちには、いたるところでこと欠かない。ただしこれは研究の遅れのなせる業であり、検討が深化、発展したさいには必ず正当な評価の対象となりうるものであろう。この種の判断を下す者が、非専門家である場合には非難の対象とはならない。研究の遅れは、むしろ専門家の側に責があるのだから。ただし専門家によるこの種の判断には弁解の余地はあるまい。出来合いの概念、方法論で千篇一律に対象を計測してすますていの、怠惰で、無知な地域研究者は、徹底的に糾弾されてしかるべきであろう。

本年度の〈イスラーム経済論〉研究には、多種、多様の方々にご参加いただいた。内容の紹介は一々行なわないが、今回の報告書ではそれぞれの学識、感性あふれる執筆者たちが、それぞれの固有のアプローチで、きわめて学際的に〈イスラーム経済論〉研究の射程を広めて下さった。その主張の本性の解明に関わる論文、経済史、思想史、法制史上の重要な指摘、現代の政治、経済的問題意識からの考察等、紙数に制限があるため盛り沢山の感はまぬかれないが、編者の意図はこの研究の射程の広さを示すことにこそあったのであり、その意味では十分な成果をあげたと信じている。

忘れ去られた古い主題を、新たな視線で捉え直す。人影まばらな処女地の開拓には、いつでも強靱な開拓精神が要求されるが、末筆ながら旺盛な知的探究

心をもって新たな領域に踏み出され、優れた学際的成果の道標を作っていた
いた執筆者諸氏ならびに、このような努力に協力を惜しまれなかった文部省科
学研究助成金に関係された各位に深く感謝する次第である。